

教室の内外 (5)

——『竹取物語』・『伊勢物語』・『枕草子』——

吉 海 直 人

【要旨】 これまで高校古文に掲載されている平安朝の散文を題材にし、その読みを提起した「教室の内外」を四回発表してきた。これはその五回目である。内容は『竹取物語』を三分してその面白さを解説したもの、『伊勢物語』第六段の読みを提起したものの、『枕草子』「うつくしきもの」章段を分析したものの三つである。

『竹取物語』の面白さ① —— かぐや姫の登場 ——

一、竹取翁の出自

『源氏物語』総合巻で「物語の出で来はじめの親」と規定さ

れている『竹取物語』は、『かぐや姫』という別称でも親しまれている。そのため比較的平易な物語と考えられがちであるが、いざ真剣に取り組んでみると、案外やっかいな作品であることがわかってくる。試みに、冒頭部分から問題点を五つ程提示して、具体的に考えてみよう。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すちありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする

にて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の媼にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れてやしなふ。

(新編全集17頁)

第一に、「野山にまじりて竹をと」る翁について考えておきたい。おそらく彼は、自らの田畑(財産)を所有していない下層階級に属する人物であり、また小作人として農耕に従事することさえしていなかったことが窺える。そのため元手の一切からない竹(村の共有物)を伐採し、それを実用的な籠などに加工して商うことによつて、かろうじて糊口をしのいでいたと読みたい。

そんな身分低く貧しい翁が、「さぬきのみやつこ」(散吉の造一 大和国さぬき郷の里長)という由緒ある姓や地位を有しているはずもなからう(没落した可能性はあるが)。そうするとここで掲げられた名は、翁が最初から所有していたものではなく、かぐや姫を手に入れた後「勢、猛の者」(19頁)になつてから獲得したものである(その際、同時に「なよ竹のかぐや姫」という名も付けられた)。

あるいはもつと後の求婚譚の中で、帝から賜わつたものかも

しれない。とにかく元来は、まさしく名もない一介の(竹取の翁)だつたはずである。その貧しい翁がかぐや姫という「如意宝珠」を手に入れることで(原初的には夫婦となる可能性もある)、やがて富裕になる(成り上がる)という至福長者譚として見ると、役割を終えたかぐや姫の昇天もすんなり納得される。昔話ならばそれでめでたしめでたしなのだが、その別離を悲哀として強調している点に、文学としての『竹取物語』が存するわけである。

ひよつとすると望外な富を得た翁が、以前とは別人のようになり、いやがるかぐや姫を利用して権力と地位の獲得をめざしたので、神仏の加護が消失したという昔話(たとえば「夕鶴」的な読みも可能かもしれない。もつとも『竹取物語』が貴族文学である以上、理想の求婚者の条件として求められるのは、人間の善し悪しなどではなく、まさに上流貴族(高貴な血)というその一点であった。これは王子様を理想化したシンデレラストーリーとも共通する)。

二、平安朝の竹の大きさ

二つ目に「竹」について考えてみよう。

その竹の中に、もと光るたけなむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。(17頁)

妙な疑問かもしれないが、竹取の翁はこの時実際に竹を切ったのだろうか。本文のどこを読んでも「それを見れば」とあるだけで、切ったか否かの答えは得られない(血だらけ、あるいは首のないかぐや姫では困る)。ましてここに出てくる竹の具体的な太さなど、ほとんど問題視されていない。

それにもかかわらず、近代の子供絵本を見ると、必ずと言っていいほど太くて大きな竹(孟宗竹?)と、手にナタなどの刃物を持った翁が描かれているではないか。それだけ大きな竹であれば、三寸くらいのかぐや姫も十分中に入れるだろう。すべては絵師の合理的解釈ということになる。絵は物語の理解を助けてくれるが、場合によっては本文の解釈を歪める、あるいは方向付けることもある。

なお、かぐや姫は「子」「児ちひ」と表記されているけれども、赤ん坊の姿なのか童なのか、それとも大人の縮小サイズなのか、また着物を着ているかどうかともわからない。絵本の絵は様々に書かれているが、すべては創作ということになる。唯一、本文

に「あたり」とあるので、かぐや姫はすわっていたようである。そうなると、寝かされた赤ん坊では間違っていることになる。

一般によく知られている太い孟宗竹は、中国の二十四孝説話に見られるものだから、決して日本産の竹ではなかった。江戸時代中期の正徳頃(一七一〇年代)になって、ようやく中国から輸入されたものであり、平安朝には日本になかった竹である。そもそも『竹取物語』にその名が見えるのは、「なよ竹」(19頁)と、清涼殿に植えられている細い「呉竹」(33頁)だけである。その呉竹ですら「天下呉竹実如麥其後枯盡」(『日本紀略』弘仁四年(八一三年)十二月条)と、平安朝初期に実を付けた後で枯絶していた。仮にこの「呉竹」だとすると、かぐや姫は絶対には入れまい。普通には「真竹」のことと考えられているようだが、これならんとかはいりそうだ。

本来、竹の中というのは特殊な聖的空間であり、必ずしも具体的な広さを必要としない。だから竹を切る必要もないのである。ただしこの問題は、さらに竹の中に見出される黄金の量とも深く関わってくる。竹のサイズが小さければ、一回に得られる金の量が減少するからである。

三、敬語は読みを助けるもの

続いて少々やかいかいな敬語の問題に注目しておこう。翁がかぐや姫を発見した際、それがまったくの初対面であり、相手の氏素性など未詳であるにもかかわらず、

翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするに
て知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて、手にうち
入れて、家へ持ちて来ぬ。(17頁)

と、最初から「おはする」とか「たまふ」などと尊敬語が用いられている。この発言が一体誰に向けてのものかも検討の余地がある。かぐや姫に向かつて発せられたとしても、すつきりしない(赤ん坊ならなおさらのこと)。あるいは自分自身を納得させるための独り言なのであろうか。

こういった敬語の使用は、尋常ならざる相手に対する畏敬の念ともとれる。また物語の視点からすると、かぐや姫は『竹取物語』の主人公である。その主人公がいかなる登場の仕方しようとも、物語の論理として(翁の意向を超えて)、最初からかぐや姫に敬語表現を与えたと見ることも可能であろう。

また翁の側から言くと、翁の家には子供がいなかった(昔話

に多いパターン)。そのことに関連して、物語には一切描かれていないけれども、前提として翁と姫はたびたび神仏に子授けを祈願していたに違いない。その甲斐あって、今こうしてかぐや姫が授けられたのである。申し子はしばしば異形(ここでは小人)であられるが、それと察したからこそ、翁は「子(籠)になりたまふべき人なめり」と合点しているのであろう。こういった描かれざる前提があったからこそ、翁は即座にかぐや姫を神仏の申し子と判断し、敬語を付けたと考えることもできる(それ故に翁は、かぐや姫を強制的に結婚させられない)。かぐや姫は願いを叶えてくれる(如意宝珠)であり、それを養うことは、必然的に翁の家の繁栄を保証する。このように敬語表現一つとっても、物語世界は読みの広がりをも有するのである。

四、黄金から小判への変化

四つめに、黄金に関してもう少し考えてみたい。

たけの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくること
かさなりぬ。(18頁)

そもそも竹の中に入っていた金（神仙譚では不老不死の秘薬）は、かぐや姫の養育費なのであるが、それは金塊ではなく砂金だったようである。翁はその金をどれくらい所有し、かつどのよう活（処分）して「勢、猛の者」（19頁）になることができたのであろうか。金の収集期間としては、「黄金入りの」竹を取ること、久しくなりぬ」（同頁）とあるけれども、かぐや姫の成長に準じて考えると、ほぼ三ヶ月で裕福になったことになる。もっとも急に金回りが良くなったら、周囲の人々に怪しまれるのではないだろうか（竹の中の金は見つけた人のもの？）。

当時、日本は世界的に有名な金産出国であり、対外貿易の交換品としてたいそう重宝がられていた（物語中では貿易商人の「王けい」が参考になる）。しかしながら国内においては、佛像の鍍金や装身具として用いられる以外、それほど需要があったとも思えない。まして平安時代前期においては、貨幣としてはほとんど使用されていなかったようである。そうすると、果たして金イコール富（豊かさ）という現代的な等式が簡単に成り立つのかどうか、その点に関しても明快な回答は提示されていない。だからこそ江戸期以降の奈良絵本において、より具体性

を持たせるために、金が小判（貨幣）に変貌するのである。これも絵師の合理的解釈であろう。そして明治期以降は、さらにそれが金貨（コイン）に書き換えられているものもある。時代に合わせた流動的な解釈が行われている点に留意したい。

そもそも金の発掘は、百済系帰化人の進んだ技術によって、初めて可能となったものである。特に聖武天皇の東大寺大仏建立の折に、九百両もの黄金を献上した百済王敬福は有名である（『続日本紀』天平神護二年六月二十八日条）。金ということを重視すれば、そして何より竹そのものが渡来植物であることを考慮すれば、竹取の翁は百済系帰化人の末裔だったのかもしれない。そう考えると、「あやべの内麻呂」（34頁）・「高野のおほくに」（68頁）・「つぎのいはがさ」（77頁）といった渡来人的な名字を持った人々の登場とも通底してくる。

竹といい黄金といい、辞書的な知識だけでは「竹取物語」の読みには全く歯が立たない。だから読者は、古典文学を現代の感覚（特に幼児体験）でかたてに誤読している危険性がある。自らの常識を疑い、語学や文学の素養のみならず、植物学・経済学・歴史学などの幅広い視野と豊かな教養を身に付けなければ、真に古典を読み解くことなど不可能のようである（これは

私自身の反省でもある)。

五、裳着の再検討

ところでかぐや姫は、わずか三カ月で一人前の大きさに成長している。

この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまさる。

三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどかくして髪あげさせ、裳着す。(18頁)

この成長は〈筍〉を模したもので、人間としては異常であるが、竹の精霊たるかぐや姫としては順調な発育なのであろう。ただしあまり問題視されていないようだが、かぐや姫の体の成長はここで完全にストップしていると思えない。その後は昇天までの二十年間、歳もとっていないのではないだろうか(逆にかぐや姫の光を浴びた翁は、七十歳から五十歳に若返っている?)。

翁は成長したかぐや姫の成人式を計画し、髪上げと裳着を行った。実はかぐや姫の性別はこの時点まで未詳・曖昧であり、ここに至ってようやく女性であることが表明されている。ここで女性であることが明示されたということは、当然かぐや姫の

結婚話がこの後で展開されることを読者に期待させているのであろう。ところが裳着が済んでも、かぐや姫は依然「この児」「この子」(18頁)と称されており、どうも話がスムーズに流れていない。

続いて三室戸齋部の秋田によって、かぐや姫の命名式が行われ、それを契機にしてようやく求婚譚へと展開している。

この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。

このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず招び集へて、いとかしこく遊ぶ。(19頁)

つまり『竹取物語』の場合、一般的な女の成人式(裳着)が結婚と直結しておらず、むしろ「かぐや姫」という命名儀式の方が、成人式以上に重視されていることになる。しかし女性の名前は秘せられるのが普通であったから、そのこと自体尋常ではないことになる。つまり求婚者達は、最初から身分を含めて尋常ならざる女性と承知の上で、かぐや姫に接近しているのである。ここにも平安朝初期の百済王家の女性(美人)に対する憧憬が投影されていると見たい。

こうしてみると、裳着の衣装すらも怪しくなってくる。ほと

などの注釈書は、この裳を十二単衣の後方に付ける裳として全く疑問視していない。しかし『竹取物語』の時代設定が文武朝（奈良時代）だとすれば、かぐや姫は唐様の衣裳（朝服）のはずで、十二単衣では時代錯誤になってしまう（百人一首の歌仙絵では、何と持統天皇が十二単衣姿になっている）。

平安朝であつても、仁明天皇の時代あたりまでは中国様式だったらしい。小野小町にしても唐様の方がふさわしい。この場合の裳は、当然「裙」（スカート）を意味するわけである。ついでながら「裳着」の用例にしても、醍醐天皇以降にしか認められていないことを付け加えておきたい（髪上げの方は古い用例がある）。『竹取物語』の難しさがわかりただけだろうか。

『竹取物語』の面白さ② —— 求婚譚をめぐって ——

一、語りの時制

次に語りの古代性（伝統）を押さえておこう。それは第一文の文末に「ありけり」と助動詞「けり」が使用されている点で

ある。その過去の時制が次に「光りたり」と「たり」に変化することによって、物語は現在完了形へと推移している。続いて「ぬ」が登場し、そしていつの間にか現在形となることで、読者は物語世界の現在へ誘われることになるのである。重要視されている「けり」は、必ずしも物語を貫く時制ではなく、むしろ語り出しのパターン（約束事）と見ておきたい。

その後は「けり」の変形である「なりけり」が目につく。具体的には、

・この人々なりけり。 (20頁) 〈五人の求婚者の紹介〉
・年ごろ見えたまはざりけるなりけり。

(37頁) 〈くらもちの皇子の出走〉
・かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。

(49頁) 〈大伴の大納言の顛末〉
などだが、これは単なる時制ではなく、状況説明（種明かし）の用法が主となっている（いわゆる「草子地」に近い）。続く求婚譚では意識的に会話文が多出され、臨場感溢れる求婚者達の語りが展開する。それによって『竹取物語』の現実的かつ写實的描写が可能となるのである（会話的展開はかぐや姫の昇天の段でクライマックスを迎えている）。

ただし求婚失敗の末尾を見ると、みな言語遊戯的な語源説(落語の「落ち」)で閉じられているが、やはり「けり」(ける)が統一して用いられていることに留意しておきたい。

1 石作の皇子

面なきことをば、「はちをすつ」とはいひける。(27頁)

2 くらもちの皇子

これをなむ、「たまさかに」とはいひはじめける。

(37頁)

3 阿倍御主人

とげなきものをば、「あへなし」といひける。(42頁)

4 大伴御行

世にあはぬことをば、「あな、たへがた」とはいひはじめける。(50頁)

5 石上の中納言

すこしうれしきことをば、「かひあり」とはいひける。(56頁)

やや細かいことかもしれないが、こういった助動詞の法則や変化に注目することが、物語を深く味わうために必要な作業なのである。高校で古典文法を学習するのはそのためである。

二、天皇制の危機

平安朝と言わず、日本は天皇によって古くから統治されてきた。その天皇制社会において、貴族(特に藤原氏)の姫君は天皇の後宮に入内し、寵愛を受けて皇子を出産することが至上の幸福であった。ところがかぐや姫は、その天皇の求婚さえ拒否し、

帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず。(57頁)

とか、

国王の仰せごとをそむかば、はや、殺したまひてよかし。(58頁)

と主張し、姫君らしくない過激な言動によって逆らっている。これは明らかに絶対的な天皇制に対する反抗であり、それがたとえ物語世界であっても非常に危険な思想であった。

天皇は、天皇制に反するものは徹底的に排除しなければならぬ。かぐや姫という危険人物に関しても、本来ならば翁ともども死罪か、少なくとも流罪に処さなければならぬはずである。ところが帝は逆にそのかぐや姫に心ひかれ、

かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みしたまふ。よ

しなく御方々にも渡りたまはず。

(63頁)

という状態が三年も続いていた。これでは後宮が瓦解しかねないし、大切な跡継ぎの誕生もおぼつかない。天皇のかぐや姫思慕は、実のところ天皇制の危機であり、天皇失格でもあったのだ。

それは五人の求婚者の場合も同様であった。彼等は皇子(年齢的に見て今上の皇子ではあるまいが、兄弟とも考えにくい)と上達部という要職にありながら、三年以上も政務をほったらかしにしているからである。たとえその当時非常に平和な時代だったとしても、それでは政務の遂行もおぼつかない。その間に他の勢力が台頭してくるだろうから、三年後には彼等のポストなど存在しないはずである。石上麻呂足など、求婚のために死去しているのである。かぐや姫への懸想は、他の全てを放棄することによつてのみ可能なのであり、男社会にとつてこれほど危険な誘惑はあるまい。あるいはその裏に、藤原氏による他氏排斥の歴史が秘められているのかもしれない。

幸いこの問題は、かぐや姫の昇天によつて回避されたが、天皇はかぐや姫を失つた悲しみの中で、不死の薬の服用を拒否してしまふ。つまり天皇はまさに天皇の尊厳死を選びとつたわけ

で、それが二十五歳で崩御した文武天皇モデル説を一層強化することになる(その後しばらく女帝時代が続く)。

もっともかぐや姫の結婚拒否を逆手にとつて、むしろ天皇制の中で結婚できない女性、つまり天皇制の基盤を支えるために神に奉仕する斎王の喩としても十分考えられる。その点について金田元彦氏は、『竹取物語』を嵯峨天皇の皇女有智子内親王に奉られた物語と考えておられる(『源氏物語私記Ⅱ』風間書房・平成2年11月)。

三、竹取の翁の家

ところで、竹取の翁の家はどこにあるのだろうか。その唯一の手がかりは、

みやつこまろが家は、山もと近かなり。御狩の御幸したまはむやうにて、見てむや。(60頁)

という帝の言葉である。もちろんこれだけで場所を特定することは困難だし、ましてかぐや姫発見以前から、翁がずっとそこに住んでいたという確証はない。少なくとも邸は立派に建て直しているであろうし、「勢、猛の者」(19頁)に相応しいところへ転居したことも十分考えられる(もはや「竹取の翁」ではな

くなっている)からである。

それはさておき、従来「山もと」は普通名詞(山の麓)とされておき、そのためこれを重視することなく、別の観点(たとえば竹の産地など)から、奈良の広瀬神社や京都の向日市(竹の産地)などが、かぐや姫の故郷として名乗りをあげていた。

それに対して本田義憲氏は、綴喜郡田辺町(現京田辺市)の「山本」こそは、竹取の翁の家があった場所としてもっともふさわしいとされている(「かぐや姫の家」叙説・昭和54年10月)。しかしこの説は軽視されており、かろうじて小沢正夫氏が賛意を表されている程度であった(『竹取』に現れる地名)『万葉集と古今集』新典社・平成4年10月)。

もし「山本」が普通名詞ではなく固有名詞であるならば、間違ひなく田辺のそれが最もふさわしい。何故ならば田辺の山本は、奈良時代早々に条里制の駅が設置された由緒ある場所だからである。現在は近鉄線三山木駅近くに「山本駅跡」の碑があるが、そもそも三山木という地名は、三つの山(山本・山崎・南山)と高木が合体してできた新しい地名であった。

そこから程近い同志社大学京田辺キャンパスの敷地内には、第二十六代継体天皇の筒城の宮跡比定地の碑もある。「かぐや

姫」のモデルとしては、同名の「迦具夜比売命」(垂仁天皇妃)が古くから言われているが、実は『古事記』(『日本書紀』には記載なし)によれば、その父は「大筒木垂根王」となっている。父の名の「筒木」は「筒城の宮」と同一であり、これが後に「綴喜」と表記されたのである。

こういつた関連により、最近では京田辺市が山本をかぐや姫の故郷として宣伝しているが、ことはそう単純ではない。つまり「迦具夜比売命」は第十一代垂仁天皇の妃であるから、『竹取物語』の時代設定とされている壬申の乱(六七二年)からでも数百年以前となってしまう。また「迦具夜比売命」の父は「王」とあって皇族であるから、養父である竹取の翁とは身分的にも系図的にも相違してしまう。第一、帝の妃となった「迦具夜比売命」と、帝の求婚を拒否したかぐや姫とを単純に結びつけることには無理があるろう。それを承知の上で、それでも「かぐや姫」という名を継承していると言えるのであろうか。

四、「おのが」の用法

ところでかぐや姫は、帝に連れ去られそうになったとき、

おのが身は、この国に生れてはべらばこそ、使ひ給たまは

め、いと率ておはしましがたくやはべらむ。(61頁)

と口にしている。別れ(昇天)に際して翁にも、

おのが身は、この国の人にもあらず。(65頁)

と述べている。またその後にも、

おのが心ならずまかりなむとする。(66頁)

と口にしている。何気ない言葉のようだが、実はこれは非常に珍しい自称表現なのである。それが男性(老人)ならば、翁も「おのが生きぬ子」(21頁)と言っており、何ら問題はない。しかし当時の若い女性は、どうやら自分のことを「おの」とは言わなかったらしい。

反対に老女とか尋常ならざるもの(物の怪・妖怪など)に用例が固定している。たとえば『源氏物語』夕顔巻で夕顔の枕元に出現した物の怪も、

おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさまで、(164頁)

と語っている。この表現によって物の怪であることが表明されているのだが、多くの読者はそのことに気付いていない。

また『更級日記』では、迷い猫が姉の夢の中で、おのれは侍従の大納言の御むすめの、かくなりたるなり。

と、大納言(行成)の姫君の生まれ変わりであることを告げている。これも尋常ならざるものの言葉である。とすると、この

時点でかぐや姫は普通の人間ではなく、本性をむきだしにして異類(月世界人)として語っていることになるわけである。それだけ緊迫した場面であることを読み取りたい。

この「おのが」と対になるのが、「変化」という表現であろう。翁はかぐや姫に向かって

・変化の人と申しながら、(21頁)
・変化の人といふとも、(同頁)

と言っており、それに対してかぐや姫は、

・変化の者にてはべりけむ身とも知らず。(同頁)
と答えているからである。この表現には、神話的にはある特殊な能力を有する主人公性が付与されている。反面、非人間的な面も含んでおり、だからこそかぐや姫は地上の人間との結婚を拒否せざるをえないわけである。

ところで、眼前で「きと影に」(61頁)なつたかぐや姫を見て、全く仰天しない帝の設定も異常ではないだろうか。そんな化け物のようなかぐや姫だから、本来ならば正体を現わした時

点で物語から去るのではないだろうか。貴族でもなく、しかも尋常ならざるかぐや姫が、何故その後も帝の思慕の対象であり続けるのか、いささか不可解と言わざるをえない。たとえそれが物語の論理だとしても。

五、実母と養母

かぐや姫は決して孤児ではなく、両親は月の世界に健在であつた。そのことは別れに際して、

月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を経ぬるになむありける。(66頁)

と告げられている。しかし地上の世界では、竹取の翁と姫によつて養育されてきた。その育ての親たる翁と姫に、かぐや姫は惜しめない愛情を抱いているが、対照的に実の親に対しては「かの国の父母のこともおぼえず」(同頁)と、愛情らしいものを感じていない。実はこの枠組みこそ、平安朝の貴族のもつとも一般的な養育法なのである。

つまり実母は決して子供を自分の手では養育せず、必ず複数の乳母を雇つて育児全般を委ねていた。竹取の翁にしても、も

し最初から家が裕福であり、貴族的な生活をしていたとしたら、かぐや姫の養育には適当な乳母を雇つたであらう。しかしながら貧乏だったので乳母を雇えず、やむなく自分達で育てざるをえなかつたのである。

そのかぐや姫(異星人)の養育により、翁は徐々に富と地位を獲得するが、その有り様も乳母の構図とピッタリ一致する(吉海直人『平安朝の乳母達』世界思想社・平成7年9月)。つまり乳母とその一族は、養君の出世に伴つて計り知れない恩恵を被るからである。もちろんそういった利害関係だけではなく、養父母と養君との間は、実の親子にも勝る深い愛情で繋がつていた。

授乳しない姫はかぐや姫の乳母ではないけれども、役割としては養母であり乳母であると言つてよからう。しかもどうやらかぐや姫には、心を許せるような親密な侍女も存在しないようである。このような非貴族的な養育故に、養父母とかぐや姫は確かな人間愛によつて結ばれていたのではないだろうか。そう考へてはじめて、何故翁や姫があれ程異常に別離を悲しむかが納得されるはずである。

ただ問題なのは、もし姫がかぐや姫の教育係だとした場合、

はたして貴族的な社交を身に付けさせることができたのだろうか。平安朝の物語では、裕福な成り上りの受領がしばしば笑い者になっており、かぐや姫にもその恐れがある。姫が実は没落貴族出身であったとしても種明かしされないかぎり、和歌・琴・書道等の習得は説明が付かない。誰か適当な家庭教師を雇ったのであろうか。それともかぐや姫は、習わずして先天的にあらゆる教養を身に付けていたと読むべきなのだろうか。

『竹取物語』の面白さ③ ——月に帰る——

一、観月の変貌

『竹取物語』の終盤になると、唐突に月の記述が増加する。

三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、とすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたまふ。

(64頁)

から始まって、八月十五夜に向かって月をめぐる問答が続いて

いる。翁が「月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」(65頁)と制止すると、かぐや姫は「いかで月を見ではあらむ」(同頁)と反論する。そして遂に「おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり」(同頁)と告白する。この間にかぐや姫は、過去の記憶を取り戻しているであろう。

他の作品にも「月をあはれといふは忌むなり」(後撰集「六八四番」)とか、「月をあはれと忌みぞかねつる」(小町集「三六番」)、「ひとり月はな見たまひそ」(源氏物語「宿木巻402頁」)。「月見るは忌みはべるものを」(同404頁)といった類似表現が見られる。どうも古代において「月見」は忌避されていたようである。その証拠に、『万葉集』や『古今集』には中秋の名月を詠み込んだ歌が見られない。

ところが漢詩などの中国文化の輸入に伴い、貞観年間(八六〇年頃)から観月の詩宴が行われるようになった。延喜五年(九〇五年)には初めて宮廷行事として観月の宴が開催されている。それが次第に広がって一般化していったのであろう。もちろん中国においても古くから観月の風習があったわけではなく、盛唐頃をその起源としている。『白氏文集』の「三五夜中新月の色、二千里外故人の心」などがその代表例である。

同じく『白氏文集』巻一四「贈内」に「月明に対して往時を思ふなかれ、君が顔色を損じ君が年を減せん」とあり、中国において必ずしも陽性であったわけではないようである。『古今集』所収の在原業平の「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」(八七九番)歌は、この『白氏文集』の影響下に詠まれたとされている。月を否定的に不吉なものにとらえる見方は、必ずしも日本固有の民俗信仰とは言いきれないわけである。

さらに古代の月は畏怖と憧憬の対象でもあり、『万葉集』の「月夜見の持てる変若水」(三二四五番)など、死と再生の象徴として考えられる(だからこそ月の使者は不死の薬を携帯していたのである)。ただし「月読の命」(『古事記』上巻)、「月読をとこ」(『万葉集』九八五番)、あるいは「桂男」(『狭衣物語』)とあるように、月の性別は男であった。これも中国の影響であろうか。

以上のように中国の神仙譚の影響も無視できないが、それよりも『竹取物語』こそは浪漫性を醸成するための方法として、月のイメージを巧妙に折衷・創造していると考えた方が正しかろう。「月の顔見るは、忌むこと」は、後に昇天するかぐや姫

の手紙には「月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ」(73頁)と記されるのだが、しかしそれでもタプー性は打ち消せない。むしろ月へのタプーは、かぐや姫の月への昇天を経ることにより、地上世界で確立したと読むべきではないだろうか。

二、天上の理想郷と地上の情け

天上界は理想郷であり、人間の求めてやまぬ至上の世界である。かぐや姫はそこで何らかの罪(姦通罪?)を犯し、それを償うために地上に流されてきた。だから罪が消えた今、本来ならば喜びいさんと帰郷するところである。それにもかかわらずかぐや姫は、

さる所へまからむずるも、いみじくはべらず。老いおとろへたまへるさまを見たてまつらざらむこそ恋しからめ。

(70頁)

と述べ、汚れた人間界の中に未練を残し、「おのが心ならず」(66頁)・「心にもあらで」(73頁)月へ帰るという姿勢を貫いている。

天上界は絶対であり、それに対して地上はまったく無力であった。天人はこの地上を「穢き所」(72頁)として、大地に

足をつけようともしない。しかしながらかぐや姫は、天の羽衣を着る前に、帝に別れの手紙を書く。

御衣をとりいでて着せむとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。「衣着せつる人は、心異になるといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひそ」とて、いみじく静かに、朝廷に御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。(74頁)

天人が「遅し」と急かした時、かぐや姫は「物知らぬこと、なのたまひそ」と言つて逆に天人をたしなめている。理想的であるはずの天人が、むしろ情けをわきまぬ者として批判され、それによって逆に人間界の「あはれ」が強調・評価されているのであろう。

またかぐや姫をやるまいとする翁の言葉や行為は、確かに愚かには違いない。しかしその行為の源には、溢れんばかりの人間愛と深い悲しみがあった。汚れてはいるものの、地上の生活を通して「あはれ」の心を知ったかぐや姫は、そのヒューマニズムを肯定し、むしろ理想的なはずの天人の所作を批判しているのである。それは決して仏教的思想とは相入れないかもし

れないが、物語に通底する宮廷批判・社会風刺と同様、作者の最大の主張・抵抗として受け止めておきたい。

結局『竹取物語』が発見したのは、かぐや姫によって相対化された人間の営みであり、人間として生きることであった。

三、かぐや姫の罪

かぐや姫は、翁の功德の褒美として翁の前に姿を現わしたのであるが、もう一方ではかぐや姫自身が罪人であり、犯した罪を償うために地上に放逐されたことになっている。そのことは迎えに来た王とおほしき人が、

かぐや姫は罪をつくりたまへれば、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。(72頁)

と述べていることからわかる。つまりかぐや姫の登場には、天上と地上の論理の二重構造になっていたのである。そのため翁が富と権力を獲得すればする程、その反対にかぐや姫の罪は軽くなつていくのであろう。

翁にとつてみれば、自らの日毎の繁栄が、実はかぐや姫との別離を早めているのである。あるいは昔話のパターンとして、富を手中にした翁が、神仏に対する敬虔さを忘れて奢り高ぶっ

ため、せっかく手に入れたものを失うという筋書なのかもしれない(するとかぐや姫昇天後の生活は悲惨なものとならざるをえない)。

ところでかぐや姫の犯した罪については、具体的なことは何一つ記述されていない。そのためか注釈書を見渡しても、かぐや姫の身分の高さが強調されているだけで、罪に関してはほとんど沈黙している。ただ地上における結婚拒否(物忌み?)の裏返しとして、愛欲の罪(密通?)かと想定されているくらいである。

しかし月の世界は理想郷のほずである。その理想世界に人間的な罪など存在するはずもなからう。まして薬を嘗めると喜怒哀楽の感情は消失するのだから、愛欲の罪が存在しては理想郷たりえないのではないだろうか。それとも理想的な天上界にも、それなりの悪が潜んでいるという皮肉な設定なのであるか。

どうもこの罪は、地上的な視点からの論理のようであり、ひよつとすると作者の勇み足なのかもしれない。もつともイェス・キリストの原罪と同じく、かぐや姫が人間の罪をかぶっているとも考えられなくはない。そうして天上界から追放され、汚ない地上で生活することによって、新たな力を得て再生す

るとすれば、かぐや姫にとってはまさに貴種流離譚に他ならないことになる。そのことは迎えに来た王とおぼしき人がかぐや姫に敬語を使っていることから察せられる。こうして月に戻ったかぐや姫は、天照大神のごとく月の女王(支配者)になるのだ。

もつともかぐや姫の昇天を死の喩と見なせば、天人達の登場はまさに仏教の来迎図と合致する。地上の死こそが天上における再生・不死を可能とするのではないだろうか。だからこそ帝の権力をもつてしても、かぐや姫の死を止めることはできないわけである。

四、「君を衣」——江戸時代の版本の誤り

『竹取物語』は、『源氏物語』以降あまり享受されなかった。それはかぐや姫が帝の求婚を拒否したからである。撰閲家の姫君にとつて、宮中に入内して帝の寵愛を得て皇子を出産することは、至上の幸福であった(そうでなければならなかった)。そんな姫君に、たとえどんなに面白い物語であろうとも、帝の求婚・入内を拒否する『竹取物語』を読ませるわけにはいきまい。このような事情で、『竹取物語』の古写本はまったく存在し

ない。室町後期の写本がわずかに断片的に存するくらいで、あとはすべて江戸期以降のものである（奈良絵本も少なくない）。特に古活字本として流布し、以後絵入版本として広範に享受されていった。ところが面白いことに、かぐや姫の、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

(75頁)

の歌に誤植が生じているのである。

古活字本までは正しい本文を有しているにもかかわらず、それが版木に彫られる際、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君を衣と思ひいでける

になっている。二句目の「羽衣」にひかれたらしく、「哀（あはれ）」としなければならぬ四句目を、誤って「衣」と彫ってしまったのである。「君を衣と」では字数は一致するものの、歌としては全く意味が通らなくなってしまう。それにもかかわらずそのまま出版され、流布本として広まっているのはなんと不思議である（まともに読んでいない？）。

今では逆にこれをメルクマールとして、ここが「衣」となっている写本などは、版本以後の比較的新しい本文ということにされている。

『伊勢物語』第六段を読む

一、「暗き」について

『伊勢物語』第六段は、昔男が盗んできたお姫様を鬼に食われてしまふというミステリアスな内容によってよく知られている。そのため「鬼一口」章段とか「芥川」章段と称されている。まず本文を引用しておこう。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。芥河といふ河を率いきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜も更けにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籥を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつめたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたえへて消えなま

しものを

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

(新編全集119頁)

まずこの章段の成立について、片桐洋一氏の三段階成立論によれば、ここに用いられている「白玉か」歌は、『新撰和歌』所収歌だが、作者は在原業平とは無縁のようなので、『伊勢物語』に取り込まれた時期はかなり遅れることになる(第三次成立)。

そのためもあつて、合理的に理解できない部分が多々存する。たとえば視覚的な明るさに注目してみよう。真つ先に「からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり」があげられる。これは夜で問題あるまい。それに続いて女が「草の上に置きたりける露を、かれは何ぞ」と男に質問している。普通は露を知らないお姫様と解されているようだが、露は貴族の前裁にも置かず、歌

にも詠まれているので、女が知らなかったとは考えにくい。

それより問題なのは、果たして暗い夜に草の上の露が見えたかということである。国学者の賀茂真淵は、すぐ後に「神さへいといみじう鳴り」とあることから、稲光で露が光って見えたと合理的に解している。ただし天氣が崩れるのは時系列的に質問の後だから、この時まだ雷は鳴っていないはずである。となると本文にはないが、月の光で見えたとしてもいいかもしれない。ただし「暗きに」を闇夜あるいは雨雲がかかっていると、月は見えない。

二、描かれない小道具

第一学習社の教科書ではこれを、

「いと暗き」闇夜なのに、「草の上に置きたりける露」(3

行)が見えたのはなぜだろうか。

という設問に仕立てている。指導書によればその正解は、

男の従者が持つ松明の明かりに照らされて光ったのであるう。

であった。しかし本文にない「従者」や「松明」をここで持ち出すのは、設問として無理があるのではないだろうか。

ついでに高校古文の教科書を調べてみたところ、この芥川章段には俵屋宗達の「伊勢物語図色紙」が図版として掲載されることが多かった。その絵には女を背負っている直衣姿の男が描かれているのだが、そうなると松明を持つ従者どころか、男が蔵に立てこもった際に身に付けている「弓・胡籙」がどこから出てきたのかもわからない。この挿絵は本文を解釈する上で参考にならないどころか、かえって邪魔になる。何故、松明を持った従者や弓・胡籙を付けた挿絵を探しても載せないのだろうか。

この点について第一学習社の指導書では、

男は武官の装束を身につけていたのである。在原業平が近衛中将であったことを連想させる。

とまことしやかに説明した上で、

男は弓や胡籙を背負っていたのであるから、女を背負って逃げたはずはなく、馬で逃げたと見るべきである。

と、やはり本文中には出ていない「馬」まで出している。前に「従者」の存在に触れたのであれば、ここも従者に持たせていたとする方がわかりやすいのではないだろうか。

三、「夜も明けなむ」の解釈

ところで最初に「いと暗きに来けり」をあげたが、男は一体どこに「来た」のであろうか。素直に読めば「芥河といふ河」の辺ということになろう。しかし「ゆく先おほく」（「遠く」ではない）とある以上、男はもつと先を目指していたはずである。芥河はあくまで通過点であって、到達点（目的地）とは読めそうもない。ここで待ち構えていたのは鬼だから、この「来けり」はむしろ鬼の視点から書かれているようでもある。そもそもこの「芥河」とはどこにある川なのだろうか。歌枕として知られているのは、摂津の国（現在の高槻市）にある芥河である。前述の第一学習社の指導書は、京都と摂津の距離を考慮して、馬を出してきたのかもしれない。ただし芥河に鬼が棲むという話は聞いたことがない。また掛詞としても機能していない。

「夜も更け」、加えて天候が悪化したことで、男は女を「あばらなる倉」に押し入れ、「はや夜も明けなむ」と念じている。ここも仮に従者がいるのであれば、男は女と一緒に倉に入り、弓・胡籙を付けた従者に外を守らせるはずである。

従来この「夜も明けなむ」は、「はやく夜も明けてほしい」

と訳されてきた。それに対して小林賢章氏は、「はやく午前三時になってほしい」と訳すべきことを主張されている。¹⁾その根拠は、そもそも「明く」には夜が明けると、翌日になる(午前三時になる)の二つの意味が含まれているからである。加えて「鬼の類はまだ真つ暗な午前三時に退場していた」ことも指摘されている。²⁾

小林氏は、その後の「やうやう夜も明けゆくに」についても同様としておられる。午前三時になることで、女を食つた鬼も消えているからである。ただし時間の経過を表す「やうやう」には言及されていない。また真つ暗なはずの時間にもかかわらず「見れば率て来し女もなし」とあって、女を見ている(見えている)ことについての説明も欠けている。これも描かれてはいないが、紙燭あるいは松明などを用いて見たとでもするのであろうか。

いずれにしても小林氏によって新しい解釈が提案されているのだから、その是非について十分議論していただきたい。

四、後日譚との整合性

もう一つ、この話の末尾には、

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大皇、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。(119頁)

というなまなましい現実(種明かし)が付加されている。今までの話は全て虚構であり喩えだったというのである。これに依拠すれば、「芥河」は内裏の「塵芥を流す川」にならざるをえない。そうでないと参内の途中で女に出会うことはできないからである。

またここでは、女が「いみじう泣く人」とある。これを信じれば、「からうじて盗み出でて」というのは、女の気持ちなど無視して無理やりに略奪してきたことになる。ところが道の途中で、女は男に「かれは何ぞ」と質問している。無理やり盗み出されたのであれば、こんなゆとりのある質問などできないはずである。それも深窓の姫君故ということで説明がつくのかも知れないが、普通だったらそれは女も了解済みだからこそ余

裕であろう。つまり女は納得ずくで男に盗み出されたのだ。それはいわゆる駆け落ちに近いものだった。

こうして第六段は、相反する二つの磁力（虚実）によって、解釈が二つに引き裂かれていることがわかった。それというのも、この章段が、物語を呼びおこす「白玉か」歌を核にして醸成されているからであろう。本来は女性の歌とするのがふさわしいようだが、それを昔男の歌として据え直し、さらにこの歌を引き出すために、あえて女の「草の上に置きたりける露を、かれは何ぞ」という詞書のような問いが案出され、そこに略奪話が巧妙に取り込まれているのである。この芥河章段は、かなり無理をして二条の後章段の後日譚として付け加えられていることが読み取れる。

〔注〕

〔1〕 小林賢章氏「芥川」の段私解——「夜の明く」ということ
国語教室 98・平成25年11月

〔2〕 小林賢章氏「妖怪の活躍時間」同志社女子大学学術研究年報
67・平成28年12月。ただし昔男は、鬼が出ることも襲われることも警戒していない。

『枕草子』「うつくしきもの」章段を読む

一、「うつくし」の意味

『枕草子』一四五段「うつくしきもの」は、
うつくしきもの、瓜に書きたるちこの顔。雀の子のねず鳴
きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちこの、いそぎ
て這ひ来る道に、いと小さき塵のありけるを、目ざとに見
つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人ごとに見せ
たる、いとうつくし。
(新編全集21頁)

から始まっている。この「うつくしきもの」章段は、ほとんどの人が高校の古文の授業で習っているはずである。そこでまず形容詞「うつくし」が、現代語の「美人」の意味ではなく、「かわいらしい」と訳すべきことを教わったと思われる。それは上から目線ではあるが、小さきもの・未熟なものに対する慈しみを含んでいるからである。そのことは本文の中にも、「何も何も、小さきものは、みなうつくし。」(21頁)とあることによって補強される。

二、「うつくし」と「らうたし」

その上で、類義語の「らうたし」との違いについては、「らうたし」の対象が人間のみであるのに対して、「うつくし」は人間以外のものにも用いられる便利な言葉ということになる。なるほど「らうたし」はこの章段にも一例だけだが、

をかしげなるちこの、あからさまに抱きて、遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。(27頁)

と「ちこ」について用いられている。

それに対して「うつくし」は、冒頭からして「瓜」「雀」という非人間が羅列されている。ただし「瓜」そのものが「うつくし」いわけではなく、「瓜」に書かれている「ちこの顔」が「うつくし」いのであるから、人間からそんなに離れているわけではない。この章段における「らうたし」は「うつくし」とほぼ同じ意味でよさそうだが、『源氏物語』になると既に女性美表現へと格上げされているので、その違いも重要かもしれない。

ここまできて、この章段に「ちこ」が多用されていることに気付いてほしい。

- ・ 瓜にかきたるちこの顔
- ・ 二つ三つばかりなるちこ

- ・ 頭はあまそぎなるちこ
- ・ をかしげなるちこ

- ・ いみじう白く肥えたるちこ

他に「大にはあらぬ殿上童」・「八つ九つ十ばかりなどのの子こ」ともある。どうやらこれは十歳以下の子供が対象らしいが、それこそ「うつくしきもの」であった。

三、「雀の子」について

ところで冒頭の「雀の子」という表現、気にならないだろうか。というのも「鳥の子」というのは鳥の卵の意味だからである。この章段の末尾にも唐突に「かりのこ」とあるが、その意味は「かるがもの卵」である。博多銘菓に「鶴の子」があるが、これも鶴の卵を餡入りの菓子に仕立てたものである。

それにもかかわらず「雀の子」は、「雀の子」以外に訳しようがないらしい(卵ではない?)。『枕草子』には「心ときめきするもの」章段にも「雀の子飼ひ」が出ている。そうなるとうつくしきもの「章段の「雀の子」にしても、野生の雀では

なくベットとして飼われているものということになる。

そこですぐに想起されるのが『源氏物語』若紫巻の、

雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるもの
のを。

である。紫の上に「雀の子飼ひ」をさせているのは、『枕草子』を踏まえてのことではないだろうか。ただしここでは伏籠から逃げてゐる点、既に飛べる雀（成鳥）のようである。「子雀」といってもそれは小さいだけであつて、決して雀の雛ではあるまい。

「雛」に関しては、「鶏の雛」についても描かれている。こちらには「ひよこ」でよさそうである。もちろん鶏は成鳥になつても飛べないのだが、「雛」の間は羽の色も違うので、見分けはつきやすい。その雛について「人の後先しりぞきに立ちてありくもをかし」と評しているが、ここだけ「うつくし」ではなく「をかし」となつてゐる点も気になるところである。ひよこそのものではなく、その動きを評価しているのであるうか。

四、読者参加型

全体の流れから察するに、「何も何も、小さきものは、みな

うつくし」までで完結しているように読める。その後の「大さにはあらぬ」以下は、「うつくしきもの」章段に後から増補されたものではないだろうか。「鶏の雛の」以下も同様である。特に末尾の「かりのこ。瑠璃の壺」は言葉だけが投げ出されており、これをもって章段を閉じるのは、読者にとってやや納得しがたい。

もともと『枕草子』は清少納言単独の著作というより、定子の命によって編纂された共有物である。それは単に読者層というだけでなく、全員参加型だったのでないだろうか。「うつくしきもの」にしても、定子の御前で女房達が思いついた答えを出し合い、その中から入選作がどんどん決まつて文章化されたと考えてはどうだろうか。

それを清少納言がまとめたわけだが、その後も引き続き答えが出されたため、それを末尾に付け足した結果、現在のような章段になつたと見る方がわかりやすい。特に類従章段は、女房参加型（読者参加型）という視点も必要であろう。